

# 再発見・牛久第二十四話

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功

## 牛久と由良家⑤

国繁の子貞繁が  
旗本(徳川將軍家直屬家臣)に列する  
——由良家累代——

貞房以降は代々高家職に

国繁—信濃守。天正18年(1590

年)の夏に豊臣秀吉より牛久村などで5435石の采地を宛行われ、牛久城に入城した。

貞繁—信濃守。天正18年に徳川家康

より江戸城に召し出されて近侍(側近くで仕える)、旗本に列する。関ヶ原の戦いでは家康・東軍の一員として出陣。ついで水戸城・伏見城の城代の役割を果たす。大坂冬の陣・夏の陣に出陣する。

貞長—旗本。寛永11年(1634年)

徳川第3代將軍家光上洛にさいして、御書院番に列して供奉(將軍のおともの行列に加わる)する。

貞房—信濃守。寛文5年(1665年)位階従五位下侍従(大名

に準ずる)に叙任。同6年に高家職(奥高家)に登用される。頼繁—信濃守。従四位下に叙任。延宝7年(1679年)に奥高家に登用される。

貞長—宝永7年(1710年)、表高家

貞整—播磨守。従四位上左少將に叙任。寛保2年(1742年)に

奥高家に登用され、宝暦6年高家肝煎になる。

貞通—信濃守。安永2年(1773年)奥高家見習、同5年奥高

家に登用される。

貞雄—高家職。

貞陰—高家職。

貞靖—播磨守(従四位侍従)。高家肝煎。嘉永6年(1853年)

11月、徳川家定に孝明天皇より宣下がくだされ第13代將軍就任。家定は、翌年1月に高松藩主松平頼胤と高家肝煎由良貞靖に上京を命じ、所司代脇坂安宅とともに参内させて、將軍宣下の謝意を表明させる。

貞時—播磨守(従四位侍従)。高家肝煎。嘉永7年4月6日、京都

御所炎上、町家に飛火して大火になった。將軍家定は、御見舞のため、10日に高家肝煎の今川駿河守を上京させた。15日には高家肝煎の由良貞時を派遣して黄金50枚外を献上し、老中首座阿部正弘を奉事奉行に任命して内裏の造営に着手させ、年末に禁裏(京都御所)へ見舞金として1万両を進献した。幕末の混乱の中で大役を果たした貞時は明治時代になると、苗字の由良を新田に復している。

老中直屬の高家職(大名に準ずる格)

高家というと、多くの人々は赤穂浪士に討ち取られた彼の吉良上野介義央の名を思い浮かべるであろう。

高家職は元和元年(1615年)に設けられた江戸幕府の職名で、明治維新までに大身旗本26家が勤めた。海舟語録(勝海舟の談話)には「高家は本当の高家で、みな高家(家柄のよい家の末だ。京都の方の使とか勅使(勅旨(天皇の意思)伝達の特使)接待とかいうようなものに勤めたのサ」とある。

高家職には格があつて、高家に就任できる家の当主が、年令が若いとかで任ぜられない場合、その家を表高家と呼び、高家に就いた場合は、奥高家と呼んだ。主任に相当する役職を肝煎高家と呼んだ。



高家職・由良播磨守貞靖・貞時の役宅(番町の堀端一番丁。田安門付近)所在地。  
【嘉永・慶応版の江戸切絵図より】  
自邸は堀端一番丁の半蔵門よりに構えていた。